

アフリカの発展に必要な五つ目の「I」

室井義雄（専修大学教授）

2006年の11月に、世界銀行の報告書『アフリカの直面する成長課題 機会、制約、戦略的方向性』が東京で発表された。同報告書では、まず、過去45年間にわたるアフリカの経済成長の歴史を分析しつつ、「U字型」成長を経験してきたことに大きな特徴があると指摘している。すなわち、アフリカでは、大半の諸国でマイナス成長が続いた1974～94年の「失われた20年」を前後に挟んで、60年代に2～5%、90年代半ば以降に再び2%を超える比較的高成長の時代を経験しているという。

そして、同報告書は、アフリカが1960～73年に経験したような、相対的に堅調な経済成長のペースを取り戻すことは可能であり、そのために克服すべき最も重要な課題は、四つの「I」、すなわち「Infrastructure(インフラ)」、「Investment(投資)」、「Innovation(技術革新)」および「Institutional Capacity(制度強化)」の整備・促進であると主張している。換言すれば、輸出主導型の経済成長を指向しつつ、民間企業の生産性と世界市場競争力を高めるために「投資」と「技術革新」を促進し、他方では、グローバリゼーションのもたらす機会の恩恵を受けるための条件整備として、とりわけ運輸・エネルギー部門における「インフラ」の整備、および政策の歪み(遂行の罪)の回避と公共財の不十分な提供(怠惰の罪)の克服という「制度強化」が不可欠であると論じている。

しかし、何か物足りない。最も重要な「I」が抜け落ちてはいないだろうか。すなわち、それは「I(主語としての私自身)」そのものであり、「Identity(何々国民としての帰属意識)」、あるいは「Independence(自らを相対化する自立=自律心)」であろう。例えば、「I am a Muslim Hausa」という自己認識と、「We are Nigerian」という国民意識が心理的な葛藤なくして共存せねばならない。あるいは、パイプラインからの「盗油」に起因する爆発事故で238名が死亡するというような、悲惨な出来事を根絶せねばならない(2006年12月28日、ナイジェリア赤十字社発表)。

上記の報告書自体、「アフリカでは、契約履行の困難さ、不十分なインフラ、犯罪、不正、規制などがもたらす代償が売上高の25%以上(一般的な企業納税額の3倍以上)にもなりうる」と嘆いているが、アフリカの「経済成長」は、純粋な開発経済学のみでは解き得ない「社会発展」の問題である、という認識がこれまで以上に必要なのである。